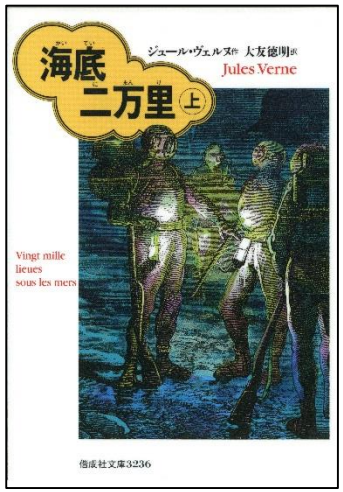
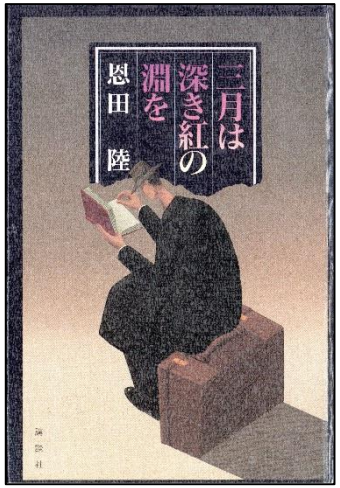
図書館でボランティア活動をしてくれた中高生のみなさんに、オススメの一冊を紹介していただきました！（編集にあたり、内容は変えずに一部修正しています。）





『海底二万里』（上・中・下）
ジュール・ヴェルヌ／作
大友　徳明／訳　偕成社
「巨大な鯨」を探しに行ったのに潜水艦に暮らし始めた?!アロナクス教授と共に海底の暮らしを楽しみ、海を冒険してみませんか？そして謎のネモ船長の秘密を訪ねていきましょう！（莫韻）

『三月は深き紅の淵を』
恩田　陸／著　講談社
たった一人に一晩だけ貸すことができる不思議な本をめぐる４つの物語。作者の本に対する愛が伝わる本好きにはたまらない作品です。これを読めばあなたも幻の本が読みたくなるはず。（Ｓ・Ｍ）

●ご感想、本の紹介など、下記のメールアドレスにお寄せください。
メール投稿の際は件名にＹＯＵＮＧ＝ＪＩＮ、本文に年齢・ペンネームを明記してください。
●本の表紙掲載については、出版社の許諾を得ています。
編集・発行　長岡市立中央図書館（0258-32-0658）

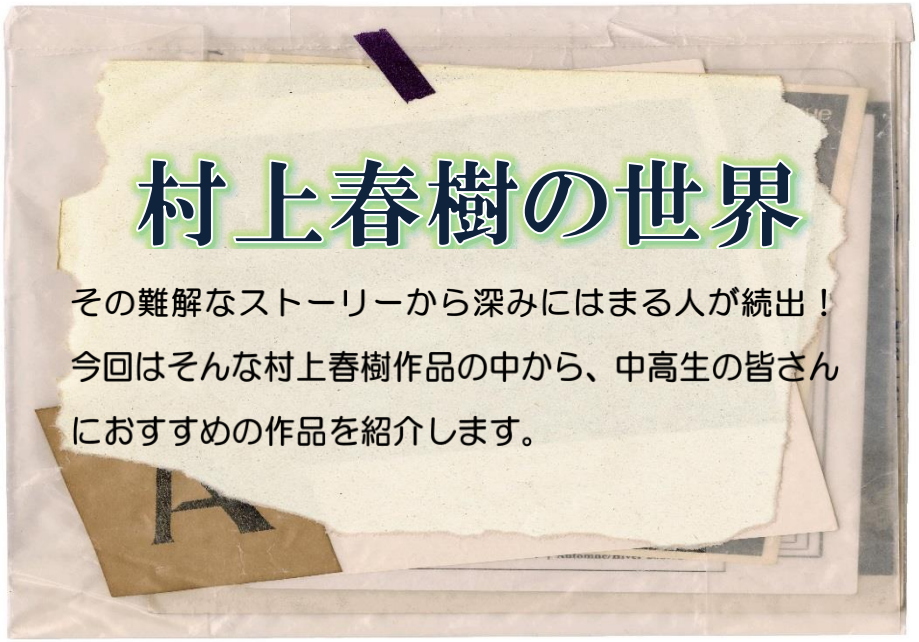
スマホサイト→

図書館ＨＰ　https://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp
図書館メールアドレス　lib@city.nagaoka.niigata.jp

←携帯サイト

WE'RE YOUNG-JIN

長岡市立中央図書館ヤングアダルトNews
ヤンジン Vol.54　2019.2

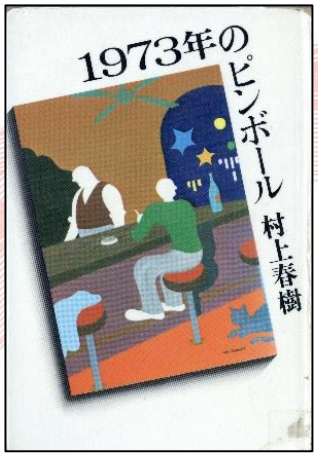


村上春樹の世界

その難解なストーリーから深みにはまる人が続出！
今回はそんな村上春樹作品の中から、中高生の皆さんにおすすめの作品を紹介します。



『またたび浴びたタマ』　言葉遊戯
村上 春樹／文　友沢 ミミヨ／画　文藝春秋
「記号はしるし、しるしは動き」「わしの意外な内外のしわ」「またたび浴びたタマ」・・・。
これ全部、上から読んでも下から読んでも同じ「回文」です。村上春樹が仕事の合間に楽しんで作った回文が、あいうえお順に並んでいます。最初のページからじっくり読んでも、途中から読んでも、悶絶すること間違いなし。



『1973年のピンボール』 長編小説

村上　春樹／著　講談社

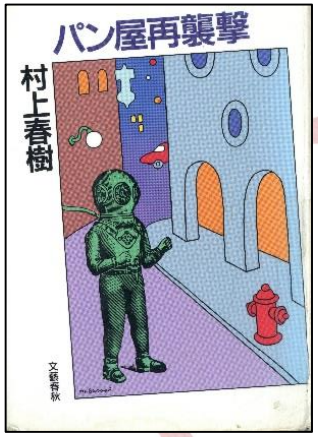
翻訳で生計を立てていた僕は、ふとしたことからアメリカ製ピンボールに出会う。その台に魅了され、ゲームセンターが解体されたあともピンボール台を探して歩く。一方友だちの鼠は住み慣れた街を出ていこうとしていた。恋人を残して・・・。透明感あふれる初期の作品です。



『カンガルー日和』 短編集

村上　春樹／著　佐々木 マキ／絵　平凡社

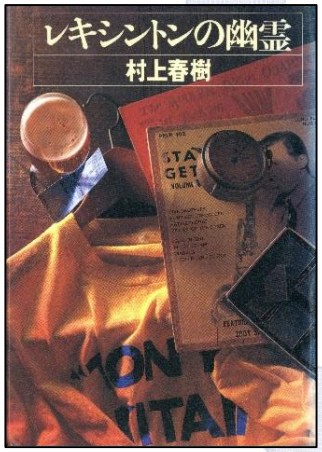
初期の作品集。「カンガルーを見るための朝はやって来た」「彼女は僕にとって 100%の女の子」など、作品中に出てくる言葉が魅力的。読んでみると少し不思議な世界にいつの間にか入りこんでいるはず。村上春樹作品を読んだことのない、初心者におすすめしたい 1 冊です。収録されているどの話も短く、気軽に読むことができますよ。



『パン屋再襲撃』 短編集

村上　春樹／著　文藝春秋

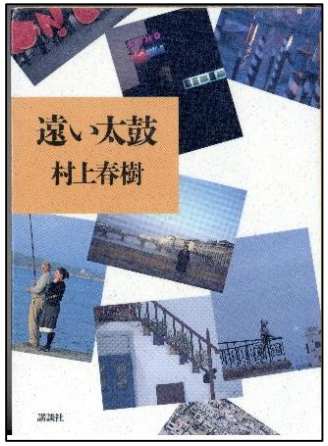
「もう一度パン屋を襲うのよ。それも今すぐにね」と彼女は言った。夜中の２時過ぎに目を覚ました僕と妻は、耐え難いほどの空腹感から、パン屋を襲撃することを思いつく。「それは正しいとか正しくないとかいう基準では推しはかることのできない問題」という作中の言葉通り、善悪を超えた村上春樹の世界を楽しもう。



『レキシントンの幽霊』 短編集

村上　春樹／著　文藝春秋

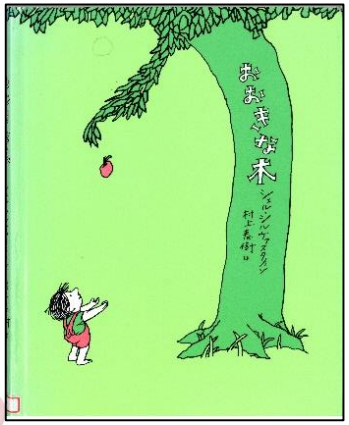
ひょんなことから知り合った建築家の友人から、ボストン郊外の古い屋敷の留守番を頼まれた主人公。その晩、奇妙な出来事が彼をおびやかす…。本書収録の７つの短編には、孤独や喪失、得体の知れないものへの恐怖が、淡々とした文章で綴られています。この不気味で独特な雰囲気を、あなたもぜひご堪能ください。



『遠い太鼓』 紀行文

村上　春樹／著　講談社

37 歳から 40 歳までの 3 年間、ヨーロッパ各地を転々としながら『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』という 2 つの長編小説を書き上げた著者。紀行文の形をとりながら、異国の人びととの関わりや妻とのやり取りなど、クスッと笑える場面も満載です。生活者としての村上春樹を垣間見ることのできる作品です。



『おおきな木』 翻訳絵本

シェル・シルヴァスタイン／作

村上 春樹／訳　あすなろ書房

木と少年はとても仲良しでした。でも少年は大きくなり、木のことを忘れます。それでも木は少年を待ち続け・・・。原題は「The Giving Tree」、直訳すると「与える木」。2010 年に村上春樹が翻訳した絵本です。少年を愛し、すべてを与え続ける木から、あなたは何を感じるでしょうか。